

『資本論』における物象化・物化・疎外—マルクス唯物論の基本概念—

平子友長

1. 物象化 Versachlichung と物化 Verdinglichung

モノは、英語では thing、フランス語では chose と一語で表現されるのに対して、ドイツ語では Sache と Ding という2つの単語が存在する。Sache（物象）と Ding（物）は、ドイツ語の日常語においても区別されている。例えば Sache は、法律用語として「事案」、「事件」、「物件」を意味し、また「問題の核心」、「政治運動の目的」、「義務」や「責務」などを意味し、複雑な社会的関係を背景として成立しているモノを意味する。これに対して Ding は自然に存在する事物を意味し、日本語のモノに近い。マルクスは、商品、貨幣、資本の本質を、人と人との関係がモノとモノとの関係として転倒的に現象することに求めたが、さらにこの転倒関係を Sache のレベル（物象化）と Ding のレベル（物化）という二段階の論理で展開した。

資本主義的経済システムにおいて生産者と生産者との関係は、まず Sache と Sache の関係へと転倒するが、ここでは Sache と Sache の関係それ自体が社会的関係を表現しているので、経済的関係の神秘化はまだ始まったばかりである。ところがこの転倒関係が Sache から Ding へと進んでゆくと、モノとモノとの関係という次元が消えて、Ding はさまざまな性質の担い手として登場するだけである。例解すれば、利潤、利子、地代はすべて剰余価値の異なる現象形態にすぎず、剰余価値は本質的には資本主義的生産過程において産業資本が賃金労働者から無償で搾取した剰余労働が対象化されたモノである。ところが利潤、利子、地代のレベルになると、労働者の剰余労働との関係は消え失せ、生産手段、貨幣、土地はそれぞれモノとして利潤、利子、地代を果実として自動的に生み出す性質を持っているかのように現象する。このような経済的関係の神秘化の最終的段階をマルクスは、物象化 Versachlichung と区別して物化 Verdinglichung と呼んだ。以上述べたことを概念的に整理すれば、次のようになる。

資本主義的商品社会の独自性は、全面的に依存しあっているが直接的には社会性を喪失している私的労働の独自の（非直接的な）社会的性格に由来している。ここでは私的労働者たちの社会的関係は、労働の次元における社会的関係としては現れず、物象と物象との社会的関係という転倒した現れ方をする。このように人格と人格との社会的関係が物象と物象との社会的関係へと転倒する（転倒した現象形態をとる）ことを物象化と呼ぶ。物象化とは、社会的関係の次元が人格から物象へとずらされることである。社会的関係の次元がずらされることによって、さらに、私的労働の社会的性格は物 Ding としての物象に内属する社会的自然性質 gesellschaftliche Natureigenschaft として現象し、物象はこの社会的自然性質を生まれながらに（それゆえ物象相互の社会的関係の外部でさえも）持つ

ている自然性質として現れる。物象の社会的関係規定が物の社会的自然性質へと転倒し、それによって社会的関係の隠蔽と神秘化がもう一段昂進することを狭義の物象化と区別して物化と呼ぶ。すでに物化した規定（社会的自然性質）を備えた物象と物象との関係が、物象化のより展開された規定となる。したがってマルクスの物象化・物化論は、(1)人と人との関係がモノとモノとの物象的關係に転倒する論理（物象化 1）、(2)モノとモノとの物象的關係の規定がモノの社会的自然性質に転倒する論理（物化）、(3)人と人との生産関係が、最終的に、社会的自然性質を内在化させたモノとモノおよびモノとヒトとの物象的關係に転倒する論理（物象化 2）という 3 段階の論理によって構成されている。『資本論』第 1 巻からの以下の引用文では物化、物象化の順に説明がなされているが、これは(2)から(3)への論理展開に対応している。

商品形態の秘密はただ次の点にある。すなわち商品形態は人間たちに対して彼ら自身の労働の社会的性格を労働生産物それ自身の対象的な性格〔使用価値性格および価値性格〕として、つまりこれらの物の社会的自然性質として映し返し〔物化〕、したがってまた総労働に対する生産者たちの社会的関係もまた生産者たちの外部に存在する諸対象の社会的関係として映し返す〔物象化〕点にある。このようなすり替えによって労働生産物は商品となる。商品とは、**感性的に超感性的な物つまり感性的に社会的な物**のことである。(MEW 23: 86)

マルクスにおける物象化と物化の関係についての研究が国際的に見てもこれまで十分に行われてこなかった理由の一つは、物象化（物象化された *versachlicht*）および物化（物化された *verdinglicht*）という用語が『資本論』の中で登場する回数が少ないという事情がある。『資本論』において物象化は 4 回、物化は 2 回登場するのみである。しかしこのことは、マルクスの経済学批判において物象化・物化があまり重要な概念ではないことを意味しない。以下、『資本論』の用例に即して両概念の意味を検討してみたい。

商品に内在する使用価値と価値との対立、私的労働が同時に直接的に社会的な労働として表されなければならないという対立、特殊な具体的労働が同時に抽象的一般的労働としてのみ認められなければならないという対立、**物象の人格化と人格の物象化**との対立、— この内在的矛盾は、その展開された運動諸形態を商品変態の対立というかたちで受け取るのである。(MEW 23: 128)

物象化とは、人格と人格の関係である生産関係が物象と物象との関係および物象の人格に対する関係として現象することである。人格は主体、物象は客体と言い換えることもできる。人格（または主体）が物象化することは、そのことの裏面として同時に、物象（または客体）が人格化（または主体化）することでもある。このことを表現するために、マルクスはしばしば「物象の人格化と人格の物象化」、「物象の人格化と生産関係の物象化」というように物象化と人格化をペアで使用している¹。この関係はまた「主体の客体への転

¹「それゆえ、剰余価値のこの二つの形態〔利子と産業利潤〕においては、剰余価値の本性、

倒 Verkehrung およびその逆の転倒」(MEGA II/4. 1: 64)、「物象と人格との間の転倒」²としても把握されていた。

物象化と区別される物化の意味をマルクスのテキストに即して理解するためには、同一パラグラフのうちに両概念を登場させている以下の引用文が重要な手掛かりになる。

資本—利潤、またはより適切には資本—利子、土地—地代、労働—労賃においては、つまり、価値および富一般の構成部分とそれらの源泉との関連を表すこの経済的三位一体においては、資本主義的生産様式の神秘化、**社会的関係の物化、すなわち素材的生産関係とそれらの社会的規定性との直接的癒着**が完成されている。それは、魔法にかけられ、転倒させられ、逆立ちさせられた世界であり、この世界では、ムッシュー資本とマダム土地とが社会的登場人物でありながら、同時に直接には**単なる物**として奇怪な馬鹿騒ぎを演じるのである。この虚偽の仮象、この欺瞞、富の異なる社会的諸要素相互の自立化と骨化、こうした**物象の人格化と生産関係の物象化**、こうした日常生活の宗教を解消したことが、古典派経済学の偉大な功績である。(MEW 25:838)

上記引用文において物象化の意味は、「物象の人格化と生産関係の物象化」というフレーズから明白である。他方、物化とは「社会的諸関係の物化」であり、その点で「生産諸関係の物象化」と共通するが、物象化との違いは、物化が「素材的生産関係とそれらの社会的規定性との直接的癒着」である点にある。上掲の引用文は、経済的三位一体的関係（資本が利子を生み、土地が地代を生み、労働が労賃を生むという関係、これがいわゆる主流派経済学の理論的出発点をなす）を説明する文章である。ここで「素材的生産関係」とは、土地、生産手段（労働対象、労働手段）、労働という生産過程を構成する素材的諸契機の技術的關係を意味する。これに対してそれらの「社会的規定性」とは、それらが資本主義的生産において帯びる地代、利潤、労賃という特定の社会的形態的規定を意味する。物化とは、資本主義的生産過程を構成する諸契機の自然的素材的規定と社会的形態規定とが「直接的に癒着」し、社会的形態規定が消失する事態を意味する。より一般的に表現すれば、物化とは、生産過程を構成する諸契機（生産手段、土地、労働など）の社会的形態規定と

つまり資本の本質および資本主義的生産の性格は、完全に消し去られているだけでなく、反対物に転倒している。しかし、**物象の主体化、主体の物象化**、原因と結果の転倒、宗教的な取り違え、資本の純粋な形態 G-G' が、無意味に、一切の媒介なしに表示され表現される限りでは、**資本の性格と姿もまた完成されている。**」(MEGA II/3. 4: 1494)

²「労働者を買うという生活手段の、または靴屋職人を充用するという皮や靴型などの生産手段の規定された経済的性格、このような物象と人格と間の転倒 Verkehrung zwischen Sache und Person、それゆえ [生活手段および生産手段の] **資本主義的性格は、資本主義的生産においては、したがってまた経済学者たちの空想においては、生産諸要素の素材的性格と分かちがたく癒着している verwachsen**」(MEGA II/4. 1: 82)。

この引用において、「物象と人格と間の転倒」は物象化の問題、経済的性格が「生産諸要素の素材的性格と分かちがたく癒着」することは物化の問題である。

自然的素材の規定とが分かちがたく癒着・合成し、結果として特殊社会的形態規定が消失し、表面的には歴史貫通的な自然的素材の規定だけが現象することである。

物化は、経済的三位一体の関係において最も完成された現象形態をとるが、物化それ自体は商品段階においてすでに成立している。『資本論』の論理は、商品、貨幣、資本（産業資本、商業資本、利子生み資本）、土地所有の順に、資本主義的生産関係の物化による神秘化が発展してゆく過程の論理である。

マルクスは、社会的形態規定が素材の規定と癒着し、社会的形態規定をヴェールに隠した自然的規定として現象する状態を性質 Eigenschaft という概念で表現している。ある対象物が人格との関係に置かれ、また人格と人格の関係が転倒させられたものとして把握されるとき、それは物象と呼ばれる。これに対して、物象においてはなお保持されていた社会的関係規定が物象の素材の規定と直接的に癒着し、社会的関係規定が消失し、物象が自身の自然的性質だけとしか関係しなくなるとき、物象は物に転化する。こうして性質との関係に置かれた物象が物であり、性質はしばしば「物に内属する一つの性質」と規定される。

物はいまや資本として現れ、資本は**単なる物**として現れ、資本主義的生産過程および流通過程の総結果は、**物に内属する一つの性質**として現れる。(MEGA II/3. 4: 1455)

マルクスは、物象と物、物象化と物化を以上のように区別したが、しかしこの区別を固定的に把握してはならない。物象化と物化は、あくまでも資本主義的システムにおける転倒過程を構成する不可分の二契機であり、物象化なしには物化は成立しないし、また物化なしに物象化は機能しない。したがって物象と物の用法も相互背反的に理解してはならず、それぞれの文脈における強調点ないし参照点の相違として理解しなければならない。物が使用される文脈においては、「社会的自然性質」との関係に焦点が当てられるのに対して、物象が使用される文脈においては、以下の引用文にみられるように、人格との転倒した関係に焦点が当てられる。

諸個人の相互的連関は、かれら自身にとって疎遠で独立したものとして、つまり一つの物象として現れる。交換価値においては、**人格の社会的関連が物象の一つの社会的関係に転化しており、人格的能力が一つの物象的能力に転化している**。(MEGA II/1. 1, S. 90)

以上のように整理すると、マルクスが直接「物象化」、「物化」という用語を使用していないテキストでも、内容的に物象化または物化を説明している箇所がおびただしく存在することが明らかとなる。マルクスにおける物象化および物化の意味を正しく理解するためには、物象化、物化という概念を直接使用しているか否かにかかわらず、内容的に両概念を説明している箇所に注目しなければならない。特定の概念が『資本論』において重要な概念であるか否かを、その概念の使用頻度で判断することができないのはそのためである。例えば、以下の引用文で論じられている内容は、明らかに物化である。

われわれは資本主義的生産様式の最も単純なカテゴリーである商品および貨幣のもとですでに、生産における富の素材的諸要素がそれに対する担い手の役割を果たしている社会的関係をこれらの物そのものの性質に転化させ（商品）、これが一層あからさまになると、生産関係それ自身を一つの物に転化させる（貨幣）神秘化性格を証明した。一切の社会形態は、それが商品生産と貨幣流通にまで進むかぎり、こうした転倒に関与している。しかし資本主義的生産様式においては、そしてその支配的カテゴリー、その支配的生産関係をなす資本においては、このこと、つまりこの魔法にかけられ、転倒させられた世界はさらにいっそう発展する。(MEGA II/4.2: 848-849)

上記の文章から、物化に三つの段階があることがわかる。第1の段階は、さまざまな社会的形態（関係）規定が物のさまざまな性質として現象する段階であり、マルクスは、商品における物化（商品の二要因としての使用価値および価値）をこの段階にあるものとして理解している。第2の段階は貨幣における物化であり、これは「生産関係それ自身を一つの物に転化させる」神秘化と規定されている。生産関係の諸契機が物の諸性質として現象する段階から、生産関係それ自体が「一つの物」として現象する段階へと物化は発展してゆくのである。第3の段階は資本における物化である。資本物化においては貨幣物化における転倒と神秘化が一層発展する。

物化は、社会的形態規定と自然的素材的規定の癒着であり、資本主義的経済システムの転倒と神秘化の極限状態として、ブルジョア社会の日常的表象における、したがってまたブルジョア経済学における物神崇拜をうみだす基礎であるが、しかし物化それ自体は物神崇拜とは区別しなければならない。物神崇拜は、物化によって産み出される転倒させられた意識の問題であるが、物化それ自体は資本主義的経済システムの客観的構造に関わる現象であり、転倒した意識の問題に還元することはできない。とはいえ物化を物神崇拜から区別しなければならない必然性は、商品・貨幣論レベルではまだ前面に出てこない。物化の本当の意義は、資本物化を資本の生産力の問題として把握するとき、初めて明らかとなる。資本は、その実質的包摂（後述）において、資本の要求に適合させて生産過程を持続的かつ革命的に変革する能力を獲得する。特殊歴史的生産関係である資本が自然および人間の身体の自然的素材的諸要素と癒着する関係を取り結ぶ（物化）ことができたことによって、資本主義的システムは自然と人間の物質代謝過程に支配的に介入し、前代未聞の生産力を創出するとともに、人間身体と自然生態系とに再生不可能なダメージを与えることができたのである。物化論の核心部分は、まさに資本の生産力論を基礎づけたことにある。これは物化論のもう一つの主題である物神崇拜（倒錯した意識）の基礎付けとは区別して議論されなければならない。

それゆえ資本主義的生産の基礎の上では、資本が生産手段の形態で存在する使用価値とこれらの生産手段、つまりこれらの物の資本—資本は一つの規定された社会的関係である一としての規定とがこのように分離しがたく融合しているのであ

る。これは、まさしく、この生産様式の内部では、これにとらわれている人びとにとって生産物がそれ自体として商品として通用するのと同様である。これが、経済学の物神崇拜の一つの土台をなしている。(MEGA II/4.1: 58-59)

上の引用文において素材的規定と形態規定との「融合」(物化)が「物神崇拜の一つの土台」をなしている(物神崇拜と同一ではない)という指摘に注目してほしい。

……こうした歪曲と転倒は、一つの現実的なものであって、労働者および資本家の観念の中にしか存在しない、ただ思い込みに過ぎないものではない。(MEGA II/1.2: 698)

物神 Fetisch と物神崇拜 Fetischismus

全面的商品生産社会においては価値が物の社会的な自然性質として現象し、価値法則が自然法則のような必然性として生産者たちを支配する。この意味で商品は社会的な物となり、それをマルクスは感性的に超感性的な物 *sinnlich übersinnliche Dinge* と規定している。労働生産物が物として社会的権力を獲得することは、生産者たちの労働が社会的に全面的に依存しあいながら労働行為の次元では直接的に社会的性格を獲得することができない(したがって物としての生産物に社会的性格を全面的に委譲せざるをえない)ことの必然的結果であった。この社会的権力を自らの自然性質として持っている物をマルクスは物神 Fetisch と規定している。物神とは、私的諸労働の独特の社会的性格が自然性質として物に憑依し、その結果、人格(生産諸主体)を支配する社会的権力を持つようになった物のことである。そして私的労働を行う諸主体が物神を自明な社会的事実として受容する意識が物神崇拜 Fetischismus である。

商品生産社会においては社会的生産関係が社会的自然性質を持つ物たちおよびそうした物と物との関係として現象し、生産物が物神として現象せざるをえない。このことそれ自体は、一つの客観的な関係である。物神が支配的役割を演じるこの関係が、この関係の内部にいる生産当事者たちにとっては自明な関係として意識される。これが物神崇拜である。この意識は、物象化・物化に呪縛されている限り一つの転倒した意識であり、学問的批判の対象になる意識であるが、同時にそれは商品生産・交換社会において必然的に生まれる日常的な社会的意識である。

物象の人格化

生産当事者たちがこの物神崇拜を受容し、物神となった物象の社会的機能を自分自身の主体的な意志と意欲として受けとめ、物象の忠実な担い手として能動的に行動することによって、資本主義的商品社会は初めて一つの経済システムとして機能してゆく。このように物象の機能を主体的に体現する(あるいは物象の要求を従順かつ能動的に遂行する)主体が形成されることを、物象の人格化(Personifizierung der Sache または Personifikation der Sache)と呼ぶ。

資本家は、**人格化された資本**として機能する以外には、いかなる社会的な存在理由も持っていない。……資本家は**人間になった資本**である限りでのみ尊重される。……資本家の意志と意識とは、彼が代表する資本の欲求しか反映していない。
(MEGA II/7, S. 514)

ここで資本家についていわれていること（人格の自由意志にもとづく行動が、彼において意志と意識を与えられた物象の機能以外のなにもものでもないこと）は、物象の人格化（人格化された商品としての商品生産者、人格化された貨幣としての貨幣所有者、人格化された労働力としての労働者など）のあらゆる形態に妥当する。物象化された生産関係は、物象の機能を自分の自由意志によって能動的に遂行する個人の登場によって初めて一つの経済システムとして機能し再生産される。諸個人が諸物象（商品、貨幣、資本）の機能を忠実に体现する意志と意識を備えた担い手として振る舞うこと（物象の人格化）によって、資本主義社会における物象の支配は完成する。物象化された経済システムは、物象の人格化の機能を意識的に遂行する諸個人の行動に支えられて初めて機能する。多数の人間を「物象の人格化」の枠を逸脱しないように教育し、しかもその枠内であれば過労死もいとわぬほど極限的に仕事を遂行する主体として形成するためのさまざまな技術、制度とイデオロギーのシステムが、資本主義システムの存続のために不可欠となる。

2. 資本主義に固有な生産力—資本の下への労働の実質的包摂

マルクスの物象化・物化論は、商品物象化・物化の段階で終わるのではなく、貨幣物象化・物化、資本物象化・物化へと進んでゆく。物化概念がこれまで余り注目されなかった理由の一つは、物化論の主題が物神崇拜論に還元されてきた事情がある。物神崇拜論とは区別される物化論のもう一つの作業領域は、資本物化論である。

マルクスは、資本が既存の資源および生産技術を外部から導入して、それを資本主義的生産様式に形態転化するレベルの事態を「資本の下への労働の形態的包摂 *die formelle Subsumtion der Arbeit unter das Kapital*」と呼んでいる。これに対して、本来特殊歴史的生産関係である資本が生産過程を包摂することによって、資本主義でなければ生まれることができなかった独自の生産力と生産様式が創出されることを「資本の下への労働の実質的包摂 *die reale Subsumtion der Arbeit unter das Kapital*」と呼んでいる。「資本の下への労働の実質的包摂」のレベルにおいて創出される歴史的に新しい生産力を、マルクスは「資本の生産力」と呼んでいる。ある経済システムにおいて資本・賃労働的な生産関係が支配的であることは、いまだその経済システムを資本主義的生産様式と呼ぶのに十分な条件ではない。この生産関係が、資本主義に固有な生産力と生産様式を備えるにいたったときはじめて、その経済システムは資本主義的システムと呼ばれるにふさわしい内実を持つようになる。

「資本の下への労働の実質的包摂」の基本的な定義は、相対的剰余価値生産を可能にする生産様式であることである。それでは、相対的剰余価値生産を可能とする実質的包摂の

核心的内容とは何か。

それは、(1) 資本が多数の労働者を一つの工場に集中させ、彼らを合理的計画的に組織化することによって、労働の社会的生産力を個別的労働主体から疎外された資本の生産力として継続的に発展させることである。

結合労働日に独自の生産力は、つねに労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である。それは協業それ自体から生まれる。他の人びととの計画的な協働のなかで労働者は彼の個人的制限を脱ぎ捨て、彼の類的能力 *Gattungsvermögen* を発展させるのである。(MEW 23:349)

計画的協業の中で労働者は自分の「類的能力」を発展させる。しかしこの「類的能力」を発展させる主体は資本である。したがってこの「類的能力」は労働者の生産力としては現れず、資本の生産力として現れる。

(2) 資本は、生産過程に機械設備を導入することによって生産過程を人間の身体的および精神的な能力の有機的限界から解放し、同時に、科学を生産過程に適用することによって生産過程の技術的基礎それ自身に継続的な変革を引き起こす。

資本の下への労働の実質的包摂とともに初めて生産様式それ自身のなかで、つまり労働の生産性および資本家と労働者の関係において、一つの完全な（そして絶えず継続し繰り返される）革命が起こるのである。(MEGA II/4.1: 105)

資本主義に固有な生産様式とは、特殊歴史的生産関係としての資本が主体となって、技術学的労働過程に継続的な革命を引き起こすことができる生産様式である。資本がこのように労働過程の技術学的過程自体を継続的に変革するほどに素材的世界に対する介入力を持ちうる根拠は物化である。資本において社会的形態規定と自然的素材の規定が癒着・合成するからこそ、形態を操作することによって素材的關係に変更を引き起こすことができるのである。資本は、資本主義に適合的な科学を創出し、これを直接的生産過程に継続的に適用し続けるシステムを創り出すことによって生産過程における革命を持続させることができる。この意味で、資本の実質的包摂は、理論的には、資本の下への科学の実質的包摂まで進まなければならない。労働者の熟練ではなく科学の直接的生産過程への適用が、資本主義的生産における技術の本質的規定となることによって、技術 *Technik* それ自体が技術学 *Technologie* に変貌する。技術学とは、利潤動因を物化させた科学およびそれを継続的に生産過程に適用してゆく知識・情報・技術のシステムである。

協業、工場内の分業、機械設備の適用、および総じて自然科学、力学、化学等々の特定の目的のための意識的適用への、また技術学等々の意識的適用への生産過程の転化、同様にまたこれらすべてに対応する大規模な労働等々による、労働の社会的生産力または直接に社会的な、社会化された（共同的な）労働の生産力（このような社会化された労働だけが、数学などのような人間的発展の一般的生産物を直接的

生産過程に適用することができる……)、……および**社会的発展のこの一般的生産物である科学の直接的生産過程への適用は、資本の生産力**として現れ、労働の生産力としては現れない、……それは個別的労働者の生産力としても、生産過程で結合された労働者の生産力としても現れない。(MEGA II/4.1: 95-96)

3. 資本物化としての資本の生産力と資本主義における科学

資本の生産力のレベルにおいては、もはや生産力（歴史貫通的な素材的契機）と生産関係（特殊歴史的な形態的契機）とを区別することはできず、両者は分かちがたく癒着している。資本は、資本の外部で自生的に発展する科学技術を資本主義的生産関係に導入する（形態的包摂）だけでなく、資本が主導して全く新しい科学技術・生産力を創造するのである。この意味で資本主義における科学技術は、本質的に、資本主義的性格を刻印され、物化された資本としての性格を帯びている。資本主義的生産関係を前提しなければ維持することも発展させることもできない科学・技術の一大システムが生み出されるのである。

途上国に対する先進的技術導入の多くの失敗事例が示しているように、資本主義が生み出した生産技術を、それを主導的に産みだし再生産する資本主義的生産関係が不在である場所に単純に移植することができない理由もここにある。20世紀初めに成立し、この世紀とともに消滅した既存社会主義体制の悲劇をもたらした一因もここにあった。この体制は、「科学技術革命」論のもとに、資本主義的生産力の中から資本主義的關係を捨象した超歴史的な科学技術を追い求めて失敗し、同時に、資本主義的生産技術の移植過程で自らもまた資本主義的生産関係に深部まで侵された奇怪な経済システムを作り出したのである。核兵器、原子力発電、遺伝子組み換えなど、地球生態系と人類の存続を危うくする科学・技術は、この物化された「資本の生産力」を前提にして初めて可能となったのである。

資本の下への労働の実質的包摂、それによる生産過程における継続的「革命」の鍵を握るものが、科学の生産過程への適用による社会的労働力の発展であるとするれば、科学の発展それ自体がこの「生産過程への適用」の要請に深々と規定されざるをえない。このことは、19世紀以降の各種の技術学、工学、農芸化学等の飛躍的發展が示している。さらに数学、物理学、化学などの自然諸科学は、資本主義的規定を免れた「人間的発展の一般的生産物」の姿で登場したとしても、資本主義的権力関係を「物化」させている可能性を否定することはできない。物化の論理を考慮することなく、現象面における諸科学の普遍性ないし真理性に目を奪われ、科学とその資本主義的利用との間に絶対的矛盾を設定し、「科学的真理」の擁護を資本主義克服の原動力の一つとして定立するいわゆる「科学的社会主義」は、それ自体、資本主義における物神崇拜の一形態である。

資本主義的生産がはじめて、物質的生産過程を**科学の生産への適用**—実地に適用された科学 science mise en pratique—に転化する。(MEGA II /3.6: 2065)

生産過程が**科学の適用になる**のと同様に、反対に、科学は生産過程の一要因に、いわばその一機能になる。いずれの発見も、新しい発明の、生産の新しい改良された方

法の土台となる。資本主義的生産様式がはじめて自然諸科学を直接的生産過程に奉仕させる。……科学の、人類の理論的進歩の徹底的利用。資本は科学を創造しないが、科学を徹底的に利用し、科学を生産過程に従属させる。それによって同時に、**生産に適用された科学としての科学**を直接的労働から分離させる。(MEGA II/3.6: 2060)

マルクスが、『資本論』の準備諸草稿においてしばしば「科学の生産への適用」に下線を引いて強調していることは、いかにこれを資本主義に固有な生産様式の本質的契機として重視していたかを示している³。科学の資本主義的性格を解明する際には、物化論の視点が不可欠である。なぜなら科学に対する資本主義の規定力はそのものとしては現象せず、可視的レベルにおいては「人類的发展の一般的生産物」という「価値自由」的な姿で現象するからである。

4. 人間と自然との間の物質代謝の亀裂

『資本論』においてマルクスは、生産力が「資本の生産力」に転化することによって自然と人間との物質代謝の攪乱が引き起こされざるをえないことを、『資本論』第1巻第13章第10節「大工業と農業」および『資本論』第3巻第6編「超過利潤の地代への転化」において詳しく考察している。

資本主義的生産は……一方では社会の歴史的動力を[大都市に]集積するが、他方では人間と土地との間の物質代謝を攪乱する。すなわち、人間が食料や衣料のかたちで消費する土壌成分が土地に返ることを、それゆえ土地の豊饒性を持続させる永久的自然条件を、攪乱する。(MEW 23: 528)

資本主義的農業のあらゆる進歩は、労働者から略奪する技術(Kunst)の進歩であるだけでなく、同時に土地から略奪する技術の進歩でもある。……それゆえ資本主義的生産は、ただ、同時に一切の富の源泉である土地および労働者を破壊することによってのみ、社会的生産過程の技術と結合とを發展させるのである。(MEW 23:529-530)

『資本論』成立史の最終段階(1864年~65年)、とりわけ『資本論』第3巻第1稿の「地代論」草稿において、マルクスは、ユストゥス・フォン・リービッヒ『農芸化学』(第7版)、ジェームズ・フィンリ・ウィア・ジョンストン『北アメリカについてのノート』など

³ 「新しい利用可能対象を発見する……ための地球の全面的な探索、したがって自然科学の最高度の発展は……資本にもとづく生産の一つの条件である。……それゆえ資本にもとづく生産は、一方では、普遍的産業—すなわち剰余労働、価値を創造する労働—を創造するとともに、他方では、自然および人間の諸性質の普遍的な開発利用 Exploitation の一システム、普遍的有用性の一システムを創造する、そして科学それ自体がこのシステムの担い手として現れるのである。」(MEGA II/1.2: 321-322) しかし『要綱』執筆段階のマルクスは、資本にもとづく生産の一つの本質的条件としての科学の持つ否定的な側面(自然と人間との間の物質代謝の攪乱、人間の精神的・身体的な疲弊化など)をまだ認識していない。

同時代の農芸化学の最先端の議論を取り入れつつ、資本主義的農業が土地および自然生態系の維持と両立しないという新しい観点を獲得した。こうしてマルクスは、資本主義と生態系の関係の考察という、今日エコロジーと呼ばれている研究領域を切り開いていった。マルクス最晩年の抜粋ノート（特に MEGA IV/23, 26, 31 所収の抜粋ノート）には、技術史、生理学、地質学、鉱物学、土壌学、農学、農芸化学、有機および無機化学などの著作からのおびただしい抜粋が遺されている。これらのマルクス最晩年の自然科学研究は、しばしば、『資本論』のための研究とは無縁な街学的研究であると見なされてきた。しかし、マルクスの経済学草稿と抜粋ノートを比較する研究が近年急速に発展したことによって、『資本論』執筆の最終局面におけるマルクスの主要関心の一つが、資本主義と土地（自然）の矛盾の解明にあったことが明らかになってきた。

5. 物象化論と疎外論の関係

20 世紀後半の世界のマルクス研究は、疎外概念を人間主義的本質主義に由来する初期マルクスの未熟さに還元し、疎外概念の克服に『資本論』において実現される科学的マルクスの本領を見いだすアルテュセールの主張に影響されて、マルクスの疎外概念の研究を十分に発展させることができなかつた。1970 年代以降、哲学、社会科学および人文科学のすべての領域から「主体」を排斥するいわゆる「ポスト・モダン」思想が流行したことも、疎外概念研究の衰退に拍車をかけた。日本では、アルテュセールの議論に影響され、「ポスト・モダン」思想の流行に便乗する形で廣松渉は、「疎外論から物象化論へ」という人口に膾炙しやすいフレーズを掲げて「華麗」な言説を展開した。廣松説の影響下に日本では、物象化と疎外とは両立不可能な概念であるかのような「解釈」が広がっていった。また廣松説に対抗する側も、後期マルクスにおいても疎外概念が継承されていることを指摘すること以上に議論を発展させることができなかつた。今問われることは、『資本論』段階のマルクスにおいて物象化・物化との関係において疎外概念が占める位置を確定することである。物象化・物化と疎外の概念的関係の問題は、初期マルクスと中期・後期マルクスの関係の問題とは独立に考察されなければならない。

『要綱』の以下の文章は、物象化・物化と疎外の関係について考察するための重要な視点を提供している。

貨幣の存在は、社会的連関の物象化を前提している。……人びとが信頼をよせる物象とは、人格相互の物象化された関係としての物象および物象化された交換価値としての物象である。そして交換価値は、人格の生産的活動相互の一つの関連に他ならない。……貨幣が社会的性質を持つことができるのは、諸個人が彼ら自身の社会的連関を対象として自分から疎外しているからに他ならない。(MEGA II/1.1: 93)

物象化とは「人格相互の」「社会的連関の物象化」である（第 1 の文章）。第 2 の文章において物象が「人格相互の物象化された関係としての物象」および「物象化された交換価値としての物象」という 2 つの契機において規定されている。このうち前者は、狭義の物

象化に対応し、後者は社会的規定と自然的素材的規定との癒着によって成立する「社会的自然性質」としての交換価値つまり物化に対応する。交換価値が「人格の生産的活動相互の一つの関連」であるかぎりでは、それは物象化に関する。他方で、交換価値が貨幣つまり一定重量の貴金属が所有する「社会的性質」として現れるかぎりでは、それは物化に関する。最終文章においては、貨幣において上記のような物象化と物化が成立するのは「諸個人が彼ら自身の社会的関連を対象として自分から疎外している」からであると説明される。ここで疎外とは、諸個人が自分自身の社会的関連を自分に対立させて一つの対象（物象化・物化）の姿で自分から遠ざける（疎遠化する）ことである。物象化・物化は、諸個人相互の社会的関連が諸個人から切り離されて自立化する過程全体を、主体としての諸個人からの疎遠化として把握した場合、疎外として把握される。この観点は、『経済学・哲学草稿』以来一貫している。物象化と疎外とが貨幣に関して議論されていることは、疎外が直接的生産過程における労働疎外には還元されない、より広い方法概念であることを示している。

（１） 疎外は物象化・物化を前提する

本節では、物（Ding）概念が最終的に確定される時期（1863－65年）以降における疎外概念の用例⁴を検討することによって、後期マルクスにおける疎外概念の意味を確定してみたい

疎外の最も基本的な意味は、労働を実現するための条件（労働手段、労働対象、生活手段）⁵が労働者から「疎遠な対象」として自立化し、労働者に対立し、労働者を支配する事態である。労働者は生産手段から疎外されているだけでなく生活手段からも疎外されている。

したがって、労働から疎外され、自立化させられ転化させられた労働条件の姿、つまり生産された生産手段が資本になり、土地が私的所有、独占された土地である土地所有になる姿は、労働過程、つまり生産過程一般のなかでの生産された生産手段および土地の定在および機能と一致するのである。（MEGA II/4.2: 846）

さらに注意しなければならないことは、労働者から疎外される生産手段や労働手段は、機械や食料といった単なるモノではなく、労働者相互の社会的関連を「社会的自然性質」として物化させたモノであることである。資本の支配のもとで労働者から疎外される労働生産物とは、労働者が生産したモノとしての生産物ではなく、さきに貨幣において考察したように諸個人相互の社会的関連を物化させたモノである。だからこそ生産手段や生活手

⁴ 『資本論』第1巻（第2版）における疎外 *Entfremdung, entfremdet* の使用例は、MEGA II/6: 417, 527, 558, 588 (MEW23: 456, 596, 635, 674) であり、第3巻第1稿におけるそれは MEGA II/4.2: 119, 120, 337, 649, 846, 851 である。エンゲルス版『資本論』第2巻においては疎外の使用例は存在しない。

⁵ マルクスは「労働の客体的諸条件」として「土地、原料、生活手段、労働用具、貨幣またはこれらすべて」（MEGA II/1.2: 406）を挙げている。

段はモノとして、労働者のみならず資本家さえも支配する一つの「社会的権力」を持つことができるのである。

資本は、ますます社会的権力（資本家はこの社会的権力を行使する役員である、そしてこの社会的権力は、個々の個人の労働が創り出すことができるものとはおよそ可能ないかなる関係も持ってはいない）として現れるが、しかしこの社会的権力は、疎外され自立化させられた社会的権力であり、これは物象として—しかもこの物象を媒介とした資本家の権力として—社会に対立しているのである。（MEGA II/4.2: 337）

ここに疎外概念が、物象化・物化概念をふまえて解釈されなければならない理由がある。初期マルクス研究において疎外論はしばしば社会的関係の契機を捨象した主体—客体関係論であると批判されてきた。「疎外された労働」は、社会的分業を捨象した孤立的労働過程において労働者が労働し、その生産物を資本家に取得されることであるかのような解釈がなされてきた。こうした疎外概念解釈の致命的欠陥は、主体から疎外される対象それ自体を物象化・物化された社会的関係として把握することができなかつたことである。労働者が使用する労働手段、彼が消費する生活手段そして彼が生産する生産物はすべて物象化・物化の産物であり、社会的関係を内在（物象化）させていると同時に、物化（社会的規定と自然的素材の規定の癒着）の結果として、社会的関係性を消失させた単なるモノとして現象する。

したがって疎外論と物象化論を媒介するものは物化である。『経済学・哲学草稿』「第1草稿」の「疎外された労働」分析は、従来の初期マルクス研究において多くの批判にさらされてきた。主要な批判は、「疎外された労働」における疎外論は、（1）労働主体とその生産対象との主体—客体関係の考察しかなく主体相互の社会的関係を考察する視点が欠けていること、（2）疎外論は「疎外されない」「あるべき」人間の本質を前提として成り立っている点で「主観主義的」であり、疎外論は社会関係論としての物象化論によって克服されなければならない、というものであった。われわれは、以下の議論において、このような批判がマルクスのテキスト解釈として成り立たないことを証明しようと思う。

マルクスは「われわれは国民経済上の、現に存在する事実から出発する」（MEGA I/2: 364）と述べている。「疎外された労働」が考察される際の理論的前提は、全面的な商品生産・交換が行われており、生産が資本主義的に行われ、生産物の価格が賃金・利潤（・利子）・地代によって構成され、商品の生産・交換における価値（価値の等価物としての貨幣）の支配が貫かれている社会である。スミス以降の経済学が理論的出発点として前提する事実が、マルクスの疎外概念が展開される舞台である。

この「国民経済上の」事実が表現しているものは、労働が生産する対象、つまり労働の生産物が、一つの疎遠な存在として、一つの生産者から独立した権力として労働に対立することにほかならない。労働の生産物は、一つの対象の中に固定され、物象となった *sachlich gemacht* 労働であり、労働の対象化である。労働の現実化は労働の対象化である。この労働の現実化は、国民経済的狀態においては、労働者の現実性剥奪と

して現れ、対象化は対象の喪失および対象のもとへの隷属として現れ、領有は疎外として、外化として現れる。……これらの帰結はすべて、労働者が自分の労働の生産物に対して一つの疎遠な対象に対するように関係するという規定のうちに含まれている。……労働者が自分の生産物において外化することが意味するものは、……彼の労働が彼の外部で、彼から独立して疎遠に存在し、しかも彼に対立する一つの自立的な権力になることである。(MEGA I/2: 364-365)

上掲引用文と同趣旨の文章は、『資本論』の準備諸草稿のなかに繰り返し登場する。ここで「一つの疎遠な存在」「一つの独立した権力」として労働者に対立する対象は、単なるモノとしての生産物ではなく、物化された社会的関係としての対象である。「一つの対象の中に固定され、物象となった労働」とは、具体的には、価値、貨幣、資本などの規定を帯びた生産物のことである。労働者が「一つの疎遠な対象」として関係する生産物は、それが諸労働相互の全社会的連関を物化させているからこそ、労働者を隷属させる一つの社会的権力として機能することができる。労働者の労働の類的（社会的）性格は労働生産物の社会的性質として物化される。だからこそ「疎外された労働は、人間から彼の生産の対象を奪い取ることによって、人間から彼の類生活を、つまり彼の現実的な類対象性を奪い取るのである」(MEGA I/2: 370)。

マルクスの疎外概念は「国民経済的状态」における生産諸関係の物化を前提としている。物化は物象化の帰結である。マルクスにおける疎外論と物象化論は物化概念によって相互に連結する。

(2) マルクスの資本概念－資本から資本家が生まれる

ここで議論を再び初期マルクスから『資本論』段階に戻したい。マルクスの資本概念の独自性は、資本家から資本を導き出すのではなく、資本から資本家を導き出す点にある。アダム・スミス以来の経済学では、まず資本家の存在が前提され、資本家が利潤目的で投資する財や貨幣が資本と呼ばれる。生産的労働と不生産的労働の区別をめぐる論争が示しているように、資本家の節約にもとづく生産的投資の対象となる商品および貨幣が資本となる。それは資本家の存在を前提とする資本の定義である。しかし資本を「自立化し自己増殖する価値」として規定するマルクスの場合、資本の概念規定が資本家の規定に先行するのである。

生きた労働能力の客対的諸条件〔原材料、労働用具および生活手段〕は、……生きた労働能力から区別され、しかも生きた労働能力に自立的に対立する一つの主体の客体性として前提されている。したがってこれら客対的諸条件の再生産と価値増殖、つまりそれらの拡大は、同時に、客体的諸条件を労働能力に対してよそよそしく、しかも自立的に対立する一つの疎遠な主体の富として再生産し、新生産することである。再生産され、新生産されるものは、生きた労働のこれら客体的諸条件だけではなく、この生きた労働能力に対立する自立的な、すなわち一つの疎遠な主体に属する諸価値

としての定在である。労働の客体的諸条件は生きた労働能力に対立する主体的な存在を受け取る—それが資本から資本家が生成するということである。(MEGA I/2: 370)

それゆえ資本家と賃労働者の生産は、資本の価値増殖過程の一つの主要生産物なのである⁶。……この価値増殖過程では、対象化された労働が同時に労働者の非対象性として、労働者に対立する一つの主体性をもつ対象性として、労働者に疎遠な一つの意志の所有として定立されるのであるから、資本は必然的に同時に資本家でもある。……資本の概念の中には次のことが定立されている。すなわち労働の対象的諸条件が一しかもこれらは労働自身の生産物であるにもかかわらず—労働に対立する人格をまとうこと、……労働の客体的諸条件が労働者に疎遠な一つの人格の所有として定立されている、ということである。資本の概念のうちには資本家が含まれているのである。(MEGA I/2: 414-415)

「資本から資本家が生成する」というマルクスの資本概念を正確に理解するためには、「生きた労働能力に対立する一つの疎遠な主体」をただちに資本家と理解しないことが重要である⁷。生きた労働能力から切り離され価値増殖する自立的価値としての労働の客体的諸条件それ自体が、最初に、「一つの疎遠な主体」として定立される。つまり本源的には、資本それ自体が主体なのである⁸。つぎに「一つの疎遠な主体」として生きた労働能力に対立する資本のもつ主体性を人格的に体现する存在として資本家が定立される。マルクスの「資本の人格化」概念は、(1) 資本それ自体か労働者に対立する物象(労働の客体的諸条件)として主体化=人格化すること、(2) この主体化=人格化された物象のもつ疎遠な主体性を人格的に担い体现する存在としての資本家という二つの意味を持っている。その場合、労働の客体的諸条件が「一つの疎遠な主体」として労働者に対する支配力を持ちうるのは、それらが資本家の所有物であるからなのではなく、労働の客体的諸条件が価値の自己増殖を可能にする社会的関係の物化であるからである。

(3) 『経済学・哲学草稿』の疎外概念—疎外と私的所有

⁶ だからマルクスにとって、資本家と賃労働者がまず存在し両者の相互関係の結果として資本の価値増殖が生まれるのではなく、逆に、資本の価値増殖過程の「一つの主要生産物」として資本家と賃労働者の関係それ自体が生産されるのである。これが物象から物象の人格化へと進む物象化・物化論の基本的論理プロセスである。

⁷ 『資本論』およびその準備諸草稿に頻出する形容詞 *fremd* を無造作に「他人の」、「他者の」と翻訳する傾向が見られるが、それによってマルクスが物象化・物化・人格化概念にこめた論理的含意が台無しにされてしまう。マルクスは、まず労働者にたいする労働の客体的諸条件・労働それ自身・生産物の「対象」としての「疎遠な主体性」を定立した上で、次にこの「疎遠な主体性」の人格的担い手として「他人」、「他の人格」(物象の人格化)を導出するのである。もし *fremd* をはじめてから「他人の」と訳すならば、第二段階で説明されるべき「疎遠性」の人格性が初発から密輸入され、マルクスとは異なり、「資本家から資本を生成させる」ブルジョア経済学的な議論になってしまう。

⁸ 「資本は統括的主体 *das übergreifende Subjekt* および疎遠な労働の所有者として現れる。」(MEGA I/2: 378)

資本が生きた労働能力に対立する「一つの疎遠な主体」として定立される過程を、労働者の側から把握するならば、それは「疎外された労働」として把握される。

『経済学・哲学草稿』第1草稿において「疎外された労働」は、まず(1)労働者が自分の労働の対象(労働材料、労働手段、生活手段)にたいして一つの「疎遠な対象」に対する様態で関係することとして規定され、次いで(2)労働者が自己の労働それ自体に対して「疎遠な労働」に対する様態で関係することとして規定される。以上の考察をふまえて、(3)労働者が労働の対象および労働それ自身に対して「疎遠なモノ」としての様態において関係する行為が、労働者の「類的生活」、「類的存在」に対する「疎遠なモノ」としての様態における関係行為であることが確認される。

以上の推論過程の意味について、もしそれを「第1草稿」 「疎外された労働」節の限られた文章だけから結論を引き出すとすれば、さまざまな解釈が生まれる余地が生じる。しかしマルクスの経済学批判において「対象」や「生産物」が一貫して物化された社会関係を意味していたことを確認するならば、マルクスが、第1規定において社会的関係の物化として「疎遠な対象」を考察の俎上にのせ、第2規定で物化を引き起こす「疎遠な活動」としての「労働」を考察の俎上にのせた上で、第3規定においては、物化された社会的関係それ自体をさまざまな「類」概念を設定しながら考察していることを、理解することができる。

たしかにフォイエルバッハから受容した「類」概念をキー概念としたことが、「国民経済的状态」における物象化・物化された社会関係を考察するためにふさわしい概念であったかどうかという問題は残る。事実、有効性に疑問が持たれる概念であったから、『資本論』段階ではキー概念としては放棄された。しかし第3規定において国民経済学によって理論的に提起された物化された社会関係それ自体を考察の俎上に載せたマルクスの議論の基本線それ自体は間違っていない。

分業は、疎外の内部での労働の社会性についての国民経済学的な表現である。いいかえれば、労働とは外化の内部での人間的活動の一表現、生命外化としての生命発現の一表現にすぎないから、分業もまた、人間的活動を一つの実在的な類的活動として、いいかえれば類的存在としての人間の活動として定立する働きが疎外され、外化された姿にはかならないのである。分業の本質とは……すなわち類的活動としての人間的活動のこの疎外され外化された形態であることについては、国民経済学者たちはきわめて不明確であり、またたがいに矛盾している。(MEGA I/2: 429)

「人間的活動を一つの実在的な類的活動として定立する働き」として分業を把握することは、アダム・スミスに由来している。マルクスは、上掲の引用文の直後にスミス『諸国民の富』から以下の文章を引用している。

各産業部門の相異なる生産物は、取引と交換を指向するこの普遍的性向を介して、いわば一つの共同的な資産 *eine gemeinschaftliche Masse*⁹のなかに投げ込まれるのであり、

⁹ スミスの原文では *a common stock*。

各人はそこに行つて、自分の欲求に応じて他人の勤勞の生産物のある一部分を買うことができるのである。交換へのこうした性向が分業を発生させるのであるから、この分業の増大はつねに交換する能力の拡張によって、いいかえれば市場の拡張によって制限されている[ここまでスミスからの引用]。……分業と交換に関する[国民経済学者たちによる]考察は、きわめて興味深い。なぜなら分業と交換とは、人間の活動と本質力が類に適合した活動と本質力であることの具体的に外化された表現であるからである。(MEGA I/2: 430)

(4) 『ジェームズ・ミル『経済学綱要』抜粋』における疎外概念

分業と交換が、労働の社会的性格を疎外され、外化された形態で実現するための社会的関係つまり物象化された社会的関係であるとすれば、貨幣は、この関係を物的に凝縮させたモノである。『ジェームズ・ミル『経済学綱要』抜粋』においてマルクスは、社会的関係の物化としての貨幣について卓抜な分析を行っている。

以下に、『ジェームズ・ミル『経済学綱要』抜粋』における(1)「外化された類的活動」としての私的所有から(2)「外化された私的所有」としての貨幣を導出する論理を考察しよう。まず(1)「外化された類的活動」としての私的所有について、次のように示される。

交換あるいは交換取引は、私的所有の内部における人間の社会的行為、類的行為、共同社会、社会的交通と統合であるから、それは外的な、外化された類的行為である。(MEGA IV/2: 454)

国民経済学は、人間の共同社会を、いいかえれば……類的生活を営むために人々が相互に補完しあうことを交換および取引の形態で把握する。……国民経済学は、社会的交通の疎外された形態を本質的で本源的な形態、しかも人間の使命にふさわしい形態として固定していることがわかる。(MEGA IV/2: 453)

マルクスは、私的所有を(1)分業と交換の社会的関係として把握し、これを人間の「外化された類的行為」「社会的交通の疎外された形態」として把握する。これは、社会関係次元における疎外＝外化であり、物象化に対応する(物象化された関係としての私的所有)。

貨幣の本質は、第一に、……人間の生産物が相互に補完されあう媒介的な活動または運動が、すなわち人間的、社会的行為が、疎外されて、しかも人間の外部にある一つの物質的なモノである貨幣の性質となっていることである。……物象と物象との関連それ自体、物象に対する人間の操作が、人間の外部に存在し、人間を支配する一つの存在の操作となっている。……この媒介者はいまや、それが私に媒介する対象を支配する現実的権力であるから、現実的神になることは明らかである。……したがってこの媒介者は、自分自身を喪失し、疎外された私的所有の本質、自分自身に対し

て外的になった、外化された私的・所有なのである、これはさきに「分業と交換において」私的・所有が人間的・生産と人間的・生産との外化された媒介、つまり人間の外化された類的活動であったことと同様の事態である。したがってこの類的活動の生産において類的活動に帰属するすべての性質がこの媒介者に委譲されるのである。(MEGA IV/2: 447-448)

ついでマルクスは、第一段階の疎外である関係としての私的・所有（「人間の生産物が相互に補完されあう媒介的な活動または運動」）が「人間の生産と人間的・生産との外化された媒介、つまり人間の外化された類的活動であったことと同様の事態」として、「媒介者」としての貨幣が、それ自身「外化された媒介」である私的・所有がさらに外化された形態（「外化された私的・所有」）として把握し、それは「外化された媒介」である私的・所有が「人間の外部にある一つの物質的なモノの性質」になることとして貨幣を把握する。貨幣においては「物象と物象との関連それ自体、物象に対する人間の操作が、人間の外部に存在し、人間を支配する一つの存在の操作」となる。これが私的・所有の疎外＝外化の第二段階、社会的交通の関係からモノの性質への転倒であり、「外化された私的・所有」と規定される。物化に対応する。「性質」がすでにキー概念として使用されていることに注目したい¹⁰。

このように私的・所有を（１）関係のレベル、（２）モノの性質のレベルの二重の疎外＝外化としておさえたうえで、マルクスは「なぜ私的・所有は貨幣制度にまで進まなければならないのだろうか」と問い、「なぜなら人間は社会的な存在として交換〔関係としての私的・所有〕にまで進まなければならないからである」として交換は私的・所有の前提のもとでは一価値〔モノの性質としての私的・所有〕にまで進まなければならないからである」(MEGA IV/2: 448)と答える。次に問題となるのは、モノ（私的・所有の疎外＝外化の第二段階）のレベルでの価値と貨幣の関係である。

交換を行う人間の媒介運動は……私的・所有の私的・所有に対する抽象的・関係〔関係としての私的・所有〕であり、そしてこの抽象的・関係が〔モノの性質に形態変化したものが〕価値であり、価値の価値としての現実的存在が貨幣なのである。……貨幣という金属的定在は、市民社会の生産と運動のあらゆる構成部分のうちにひそんでいる貨幣魂〔価値〕の公認の感覚的な表現にすぎないのである。(MEGA IV/2: 448-449)

¹⁰ 「貨幣は、すべてのものを買う性質を持ち、すべての対象をわがモノとする性質を持っているから、すぐれものの占有対象 *der Gegenstand im eminenten Besitz* である。貨幣の性質の普遍性は、その存在が全能であることである。したがって貨幣は全能な存在として通用する。……貨幣は、人間の欲求とその対象とのあいだの、また人間の生活とその生活手段とのあいだの取り持ち役である。しかし私に対して私の生活を媒介するものは、私にとって他者となる人間の存在をも私に媒介してくれる。貨幣は私にとって他の人間なのである。」(MEGA I/2: 435)。マルクスが「性質」に下線を引いて（本稿では傍点で表記）強調していることは、この時点でマルクスがのちに物化概念のメルクマールとなる「性質」概念の重要性に着目していたことを証言している。さらに最後の「貨幣は私にとって他の人間なのである」という一文も重要である。人々が貨幣と関係することは、人々にとって「他者」と関係することを含意している。

貨幣は、商品としての労働生産物（「市民社会の生産と運動の構成部分」）のうちですでに含まれていたとはいえ、いまだ不可視の性質にとどまっていた「価値」＝「貨幣魂」を公共的に、かつ感覚的に把握可能な形態で表現したモノである。私的所有の疎外＝外化の第二段階が、（１）「価値」のレベル（物化の第１段階）から（２）「貨幣」のレベル（物化の第２段階）への展開として把握されている。

貨幣という形で……人間に対する疎外された物象の完全な支配が現象しているのである。人格の人格に対する支配であるものが、今では、人格に対する物象の、つまり生産者に対する生産物の普遍的支配となっている。等価物、価値のうちですでに私的所有の外化という規定が含まれていたのであるが、貨幣はこの外化の感性的な定在、つまりそれ自体対象的な定在である。(MEGA IV/2: 456)

貨幣という金属体において「人格に対する物象の普遍的支配」、「生産者に対する生産物の普遍的支配」が完成される。後述するように、『経済学・哲学草稿』「第１草稿」の考察は、まさにここから始まるのである。それは、われわれは国民経済学が描く世界を事実として受け止め、それを分析することから始めると宣言したマルクスのプランにふさわしい設定であった。

最後に、人間の「疎外された社会的交通」である私的所有の外化＝疎外として把握されていた事態（「国民経済的状态」）を労働の外化＝疎外として規定し直したものが「営利労働 Erwerbsarbeit」である。

交換の関係が前提されれば、労働は直接的な営利労働となる。これは疎外された労働の関係である。……生産物は、価値として、交換価値として、等価物として生産され、もはや生産者に対する生産物の直接的な人格的関連のために生産されない。……営利労働のうちには、（１）労働主体からの労働の疎外と偶然性、（２）労働対象からの労働の疎外と偶然性、（３）労働者が、彼にとって疎遠で一つの強制であるような社会的欲求によって規定されること、……（４）労働者の個人的生存の維持が彼にとっては自分の活動の目的として現れ、彼の現実的行為が彼にとっては手段としてしか現れないこと、労働者は生活手段を営利的に獲得する(erwerben)ためだけに自分の生命を働かせることが、含まれている。(MEGA IV/2: 455)

要約すれば、「疎外された労働」とは、「営利労働」であり、「営利労働」は価値を形成する労働のことである。疎外論とは、生産における人格と人格との関係が物象と物象との関係に転倒すること（私的所有の疎外＝外化の第１段階）が労働生産物の性質に転倒し（私的所有の疎外＝外化の第２段階）、さらにこの性質が、価値から貨幣に、貨幣から資本へと発展する過程を物象の労働に対する支配と外部的自立化として把握する論理である。賃労働・資本の関係（人格と物象の関係）が、同時に賃労働者・資本家の関係（人格と人格との関係）であることはいうまでもないが、疎外論があえて最初は、「資本家」の存在を捨象

して、資本に対する労働者の関係を労働者が労働の客体的諸条件に対して「疎遠な対象」に対する様態において関係することとして把握した理由もそこにあった。このように論理的に設定することによって、資本の支配のもとにおける労働過程が、労働者の労働を「価値」として物象が吸収する過程として、いいかえれば価値の自己増殖過程として把握する展望が開かれるのである。それだから疎外論は、原理的には、資本の労働に対する関係を人格としての資本家が人格としての労働者の剰余労働を搾取する関係としては把握しないのである。疎外論は、労働に対する資本の支配をまず原理的に「物象の人格に対する支配」として把握したうえで、この原理からの帰結として「資本家」による労働者に対する支配を定立する（資本の人格化としての資本家）のである。

第2に、疎外論は、労働主体に対する物象の価値としての自立化の進展に焦点を定める論理であるから、貨幣段階における疎外と資本段階における疎外とのあいだに断絶を置かない。貨幣は諸商品から疎外されて自立化した価値であり、資本は自己増殖する自立化した価値である。価値の労働主体からの「疎遠化」と対立的自立化の進展として、両者は連結している。初期から『資本論』段階に至るまでマルクスが一貫して貨幣における疎外を問題としてきた理由もここにある。ところが労働疎外の問題を剰余労働の搾取と同一視したとたんに貨幣と資本の連結はたちきられてしまう。こうした同一視の背後には市場を対等な商品交換者相互の「自由平等」な関係として把握し、人格に対する物象の支配を見ようとしない、市場に対する幻想が存在する。

(5) 『経済学・哲学草稿』「第1草稿」における疎外概念

さて疎外論の理論的枠組みに関して以上の点を確認して、われわれははじめて『経済学・哲学草稿』「第1草稿」における疎外概念の意味を正確に理解することができる。

われわれは、マルクスの国民経済学理解が「第1草稿」から「第2草稿」「第3草稿」へと進むにつれて理論的發展を遂げてきたことを認めるが、両者のあいだにある種の理論的断絶を読み込み、「第2草稿」「第3草稿」でマルクスが主張した内容が「第1草稿」の執筆段階においてはマルクスの脳裏に存在しなかったかのような理解はとらない。「第2草稿」「第3草稿」でマルクスが主張した内容がどのような萌芽的形態で「第1草稿」のなかに存在しているか、これを確定することが、テキスト解釈学の学問的課題である。

「疎外された労働」が成立する世界は、「国民経済的状态」つまり社会的分業と生産物の商品としての全面的交換が行われている社会であり、物象化・物化された生産関係の世界である。労働の疎外論は、生産関係の物象化・物化を前提としていると同時に、物象化・物化された社会関係の形成を労働する主体の側から基礎づける論理である。

初期マルクスの疎外概念を物象化・物化概念から完全に切り離す議論は論外であるとしても、「第一草稿」「疎外された労働」の議論と『経済学・哲学草稿』「第三草稿」および『ジェームズ・ミル『経済学綱要』抜粋』で展開された「疎外された社会的交通」の論理との間に「理論的断絶」を見いだす議論は多い。

「第一草稿」「疎外された労働」を誤読する人々にかなり共通にみられるパターンは、「疎外された労働」をただちに資本家と賃金労働者との関係（剰余労働の搾取）と解釈するこ

とである。その際マルクスが、なぜ「疎外された労働」の最後の第4規定に至ってはじめて資本家を登場させたのか、いいかえればなぜ第3規定までは労働者と資本家との人間対人間の関係（階級関係）を留保して議論を展開してきたのか、という疎外論にとって決定的な論理が看過される。そしてこの見逃しを引き起こしたものは、「疎外された労働」の最重要なキー概念である *fremd* をただちに「他人の」と理解してしまったことである。*Fremd* を「他人の」と解釈してしまえば、第4規定を待たずとも第1規定からただちに「資本家」が登場してしまい、疎外論は資本家による剰余労働の搾取に解消されてしまう。

典型的な誤訳の一例は、つぎのようなものである。

疎外は、私の生活手段が他人のものであるということにも、私の欲求するものが私の手に入らない他人の占有物であるということにも、またあらゆる事物そのものがそれ自体とは別のものであるということにも、また私の活動が他人のものであるということにも、最後に—そしてこれは資本家にもまたあてはまることだが—一般に非人間的な力が支配しているということにも、現われる。(『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波書店、1964: 163-164)

Die Entfremdung erscheint sowohl darin, daß *mein* Lebensmittel eines *andern* ist, daß dieß, was *mein* Wunsch der unzugängliche Besitz eines *andern* ist, als daß jede Sache selbst ein *andres* als sie selbst, als daß meine Thätigkeit ein *andres*, als endlich, — und dieß gilt auch für den Capitalisten — daß überhaupt die *unmenschliche* Macht her[rscht.] |(MEGA I/2: 426)

ここで「他人のもの」と訳されている言葉の原語は *eines anderen* (所有格) である。それではこの所有格の主格は何であろうか。それは *ein anderes* である。これは「他人」ではなく「他のモノ」を意味する（もし「他人」であれば *ein anderer* でなければならない）。この *ein anderes* が「非人間的力」を意味することは、は文脈上からも明らかである。だからこそこの「非人間的力」は人格としての資本家をも支配するのである。マルクスは「非人格的力」を生み出す主体的な活動を疎外と呼んだのである。もし「他のモノ」をはじめから「他人のもの」と訳してしまうならば、「他人」という人格に支配の根源が帰せられることになり、マルクスの疎外概念を正確に理解する道が閉ざされることになる。

ちなみに英語版『マルクス・エンゲルス選集』第3巻所収の英訳も、*eines andern* を *someone else* または *another* と誤訳している。

Estrangement is manifested not only in the fact that *my* means of life belong to *someone else*, that which I desire is the inaccessible possession of *another*, but also in the fact that everything is itself something *different* from itself—that my activity is *something else* and that, finally (and this applies also to the capitalist), all is under [the sway] of *inhuman* power. (Economic and Philosophic Manuscripts of 1844, Marx Engels Collected Works, Volume 3, p.314.)

労働者は、彼が富をより多く生産すればするほど、彼の生産の力と規模が増大すればするほど、ますます貧しくなる。……物象世界の価値増殖 Verwertung に正比例して人間世界の価値剥奪 Entwerthung が大きくなる。(MEGA I/2: 364)

マルクスが「労働者が富をより多く生産すればするほどますます貧しくなる」というとき、それは「資本家がますます豊かになる」ことをただちに意味するわけではない。人間の「価値剥奪」に「正比例」するのは「物象世界の価値増殖」である¹¹。「労働者がますます貧しくなる」ことは、剰余労働の増大をただちに意味してはいない。

対象の獲得は、労働者が対象を生産すればするほど、それだけ労働者が占有することができるものが少なくなり、彼の生産物である資本の支配下におちいるものが増えるというほどに、疎外として現れる。(MEGA I2: 365)

ここでも疎外は、資本家の支配の問題ではなく、労働者の生産物としての「資本の支配」の問題である。

これらすべての帰結は、労働者が彼の労働の生産物に対して一つの fremd な対象に対するように関係することのうちに含まれている。(MEGA I/2: 365)

ここに登場する「fremd な対象」を「他人の対象」と理解してはならないことはすでに述べた。すくなくとも「第3規定」の考察が終わるまでは、人格として登場するのは労働者だけであり、人格としての「他人」を登場させてはならないのである。

国民経済学は、労働者(労働)と生産とのあいだの直接的関係を考察しないことによって、労働の本質における疎外を隠蔽している。……労働の生産物に対する労働の直接的関係とは、労働者の生産の諸対象に対する労働者の関係のことである。生産の諸対象および生産それ自身に対する資産家の関係は、この第一の関係の一帰結に過ぎない。(MEGA I/2: 366)

ここで国民経済学が考察していない「労働者(労働)と生産とのあいだの直接的関係」と

¹¹ 『ジェームズ・ミル『経済学綱要』抜粋』においてマルクスが商品交換の「媒介者」としての貨幣について以下のように述べていることも、「労働者が富をより多く生産すればするほどますます貧しくなる」ことがすでに貨幣において成立していることを証言している。「この媒介者は、自分自身を喪失し、疎外された私的所有の本質、自分自身に対して外的になった、外化された私的所有なのであり、この外化された私的所有が人間的生産と人間的生産との外化された媒介、つまり人間の外化された類的活動なのである。したがってこの類的活動の生産において類的活動に帰属するすべての性質がこの媒介者に委譲されるのである。それゆえこの媒介者が豊かになればなるほど、人間はそれだけますます人間としては貧しくなるのである。」(MEGA IV/2: 448)

は、資本と労働者（ないし労働）との関係を「資本家」を介在させないで、労働主体とその諸対象との関係として「直接的」に考察することである。このような理論的設定の下で初めて「疎外」概念（労働者が自分自身の活動に対して疎遠な活動に対するように関係することそれ自体によって引き起こされる、物象の労働主体に対する支配）が析出されるのである。

それでは労働の外化の核心はどこにあるのだろうか？第1に、労働が労働者にとって外的であること、すなわち労働が労働者の本質に属していないこと、したがって労働者は自分の労働において肯定されないでかえって否定され、幸福と感じないでかえって不幸と感じる……ということにある。だから労働者は、労働の外部で初めて自己のもとにあると感じ、そして労働にあっては自己の外にあると感じる。(MEGA I/2: 367)

わざわざ引用する必要もないほど有名な文章であるが、従来の多くの解釈においては、これがただちに資本家の指揮下に置かれた労働過程を表現するものと理解されてきた。しかし『経済学・哲学草稿』全体の文脈に即して理解するならば、「外化された労働」とは、価値を生産する労働一般すなわち「営利労働」（貨幣獲得を目的として営まれる労働）を意味している¹²。

さて「第4規定」においてはじめて「人間の人間からの疎外」が問題とされる。

一般に人間の類的存在が人間から疎外されているという命題は、ある人間が他の人間から疎外されており、また各人間が人間の本質から疎外されていることを意味している。人間の疎外、一般に人間が自分自身に対してもつすべての関係は、その人間が他の人間に対してもつ関係においてはじめて実現され、表現される。それゆえ疎外された労働の関係のなかでは、各人間は、自分自身が労働者としておかれている尺度と関係にしたがって他人を見るのである。(MEGA I/2: 370-371)

注意すべきことは、「第4規定」の冒頭で登場する「他人」がただちに「資本家」を意味するわけではないことである。「各人間が人間の本質から疎外されて」おり、「自分自身が労働者としておかれている尺度と関係にしたがって他人を見るの」という表現から理解できるように、これは社会的分業の中で「営利労働」をおこなう諸個人に妥当する規定である。

「資本家」が満を持して登場するのは、「もし労働の生産物が私にとって疎遠であり、疎遠な権力として私に対立するとすれば、生産物は誰のものなのか。もし私自身の活動が私

¹²マルクスは「営利労働」のもとで以下の事態が出現すると述べている。「人間が自己自身を疎外すること、この疎外された人間の社会は人間の現実的な共同社会のカリカチュアであること、したがって彼の活動は苦悩として、彼自身の創造物は彼にとって疎遠な権力として現れ、彼の富が貧困として現れること、……対象に対する人間の権力が人間に対する対象の権力として現れ、自分の創造物の主人である人間が自分の創造物の奴隷として現れること、これらはいずれも同一の命題である。」(MEGA IV/2: 452-453)

のものではなく、一つの疎遠な活動、一つの強制された活動であるとするならば、その活動は誰のものなのか」(MEGA I/2: 371)という問いが立てられたのちである。

疎外概念は、原理的には、「人間に対する物象の支配」という論理的設定のうえで説明しなければならず、その場合には、人間から疎外され、人間に対する支配力を獲得した物象が「誰のモノ」であるのかと問う必要がなかった。なぜなら物象は、その物象が帰属する「誰か」のおかげで人間に対する支配力を獲得したわけではないし、また物象の帰属者として承認された「他人」もまた、労働者とは異なる規定において物象の支配を受けているからである。したがって「誰のモノか」という問いは、労働者の「疎外された労働」を根拠づけるための問いであってはならず、「疎外された労働」の基本概念が説明された後に、そこから二次的に発生する問題なのである。何度も強調したように、マルクスは「資本から資本家を」発生させているのであって、その逆ではない。『経済学・哲学草稿』「第1草稿」においてマルクスが「資本家」としての「他人」を最終(第4)規定においてはじめて登場させ考察しているのは、「資本から資本家を」導出するという基本的方法、後年の『資本論』においても貫かれている方法を適用しているからである。

労働の生産物が労働者のものにはならず、一つの疎遠な権力が労働者に対立しているならば、このことはただ、労働の生産物が労働者以外のある他の人間のものであるということによってのみ可能である。……人間が自分自身の活動に対して一つの不自由な活動に対するように関係するならば、人間は、自分自身の活動に対して、ある他の人間に奉仕する活動、他の人間の支配、強制および束縛のもとにある活動に対するように関係するのである。……それゆえ疎外され、外化された労働によって、労働者は、労働に疎遠で、しかも労働の外部に立つ人間のこの労働に対する関係を作り出す。労働に対する労働者の関係が労働に対する資本家の関係を作り出すのである。(MEGA I/2: 371-372)

この「第4規定」によって疎外論は、労働者と非労働者の人格的关系を「物象の人格化」として展開するという新しい理論的場面を獲得する。資本家による剰余労働の搾取はこの場面で展開される。

外化された労働の自分自身に対する関係の産物として、その必然的な結果としてわれわれは労働者および労働に対する非労働者の所有関係を見いだしたのである。疎外された労働の物質的な、総括的な表現としての私的所有は、労働に対する、自分の労働の生産物に対する、そして非労働者に対する労働者の関係、および労働者に対する、彼の労働の生産物に対する非労働者の関係という二つの関係を含んでいる。(MEGA I/2: 374)

「非労働者の所有関係」という用語は、「第4規定」においてはじめて登場する。マルクスによれば、資本にもとづく生産システムを人格としての資本家による生産手段の私的所有から展開してはならず、それは価値の労働者に対する自立化と支配の一つの「必然的な

結果」として展開しなければならない。

マルクスが「それゆえ私的・所有は、外化された労働、すなわち外化された人間、疎外された労働、疎外された生活、疎外された人間の概念から分析を通じて明らかにされる」(MEGA I/2: 372)とのべたことの意味についての考察は、以上である。

(6) 疎外概念と資本主義変革の展望

前節まで疎外論と物象化・物化論の不可分の関係について考察してきた。本節では、以上の考察をふまえて、マルクスが疎外概念に託した独自の意味について考察する。マルクスは、疎外概念を使用する際にしばしば、物象化・物化されたシステムに対する労働者の抵抗に言及している。本節では、この問題を考察することによって、独特な主体形成＝陶冶論としての疎外論の物象化・物化論とは区別される独自の意義を明らかにしたい。なる。

マルクスは、『経済学・哲学草稿』においてすでに「自己疎外の止揚は自己疎外と同じ道をたどる」(MEGA I/2: 261)という認識を持っていた。マルクスは、疎外の分析によって疎外を克服する道筋を解明するという見通しを持っていた。『資本主義的生産過程の諸結果』の以下の文章は、この課題を考察するための手がかりを与えてくれる。

労働者に対する資本家の支配は、人間に対する物象の支配、生きた労働に対する死んだ労働の支配、生産者に対する生産物の支配である。……これは、イデオロギーの領域で宗教のなかで演じられている関係、すなわち主体の客体への転倒およびその逆の転倒という関係とまったく同じ関係が物質的生産において、現実的な社会的・生活過程において……現れたものである。歴史的に考察するならば、この転倒は、富そのもの、すなわち社会的労働の情け容赦のない生産諸力（ただこれだけが、自由な人間的社会的物質的土台をなすことができる）の創造を、多数者の犠牲において強要するための必然的な通過点として現れる。このような対立的な形態を通過しなければならないのは、ちょうど、人間が自分の精神的力をまずは自分に対立する独立的権力として宗教的に形成せざるをえないことと同じである。それは、人間自身の労働の疎外過程である。ここ〔疎外過程〕では、労働者ははじめから資本家よりも高い所に立っている。なぜなら、資本家はこの疎外過程に根を下ろしており、そこに自分の絶対的満足を見いだしているのに対して、労働者は、疎外過程の犠牲者としてはじめからこの過程に対して反逆する関係に立っており、この過程を隷属化過程として感じているからである。(MEGA II/4.1: 64f.)

「労働者に対する資本家の支配」は、資本の人格化としての資本家の支配であるから、本質的には、人間（労働者）に対する物象（資本関係の物化としての生産手段）の支配である。物象の支配とは、客体である生産手段が労働者を支配する主体へと転倒する（客体の主体への転倒）という側面および労働主体が（資本に合体された生きた労働として）生産手段によって可能な限り多くの労働を吸収される客体に転倒する（主体の客体への転倒）

という両側面を持っている。この物象の支配を主体的に基礎付けているものが、労働条件の労働者からの疎外、すなわち労働者が自己の労働の客体的諸条件に対して「疎遠な対象」に対するように関係することであった。

しかし疎外論は、労働者が自分の労働に対して自分自身にとって疎遠な対象の創造に対すように関係するという否定的経験の次元を開示することによって、資本主義的生産システムの歴史的限界への認識を切り開く役割を帯びている。それを告知するものが、上掲引用文の最後の文章である。資本家は「疎外過程に根を下ろしており、そこに自分の絶対的満足を見いだしている」がゆえにこの過程に安住している。しかし労働者はこの「疎外過程の犠牲者」としてこれに反逆せざるをえない。

資本主義的生産様式は一般に、労働者に対立させて労働条件および労働生産物に自立化し疎外された姿を与えるが、この姿は、機械設備とともに完全な対立にまで発展する。したがって機械設備とともに初めて労働手段に対する労働者の凶暴な反逆が始まるのである。(MEGA II/6: 417)

労働能力が生産物を自分自身の生産物であると認識すること、そして自己の現実化の諸条件からの分離を一つの不正—強制関係—であると判断することは、一つの並外れた意識であり、それ自身が資本主義的生産様式の産物である。そしてそれがこの生産様式の滅亡の前兆であることは、奴隷が、自分がある第三者の所有物であるはずはないという意識をもつようになると、奴隷制はかろうじて人為的に生き延びただけになり、生産の土台として存続することができなくなってしまったことと同じである。(MEGA II/3.6: 2287)¹³

疎外概念は、疎外過程に投げ込まれた労働者がこの過程それ自体に反逆的に関わらざるをえないことを含意することによって、物象化論を物象化された経済システム変革の歴史的展望へと架橋する方法的役割を果たしている。

上掲の『諸結果』からの引用文は、『経済学・哲学草稿』以来の問題意識が1860年代のマルクスの経済学批判においても継承されていることを示している。労働の疎外を、宗教における疎外とのアナロジーにおいてとらえる視点は、初期から後期に至るまで一貫している¹⁴。疎外過程に対する労働者と資本家の異なるふるまいについて、『経済学・哲学草稿』は次のように記している。

¹³ これとほぼ同一の文章が『要綱』(MEGA II/1.2: 371)に存在している。

¹⁴ 「人間は宗教においては、自分自身の頭のこしらえ物によって支配される。同様に人間は資本主義的生産においては自分自身の手のこしらえ物によって支配される。」(『資本論』MEW23: 649)。「宗教においては、人間の空想力、人間の脳髓および人間の心情の自己活動が個人から独立に、すなわち一つの外的な、神のないし悪魔的活動として、個人に対して働きかける。同様に、労働者の活動は彼の自己活動ではない。労働はある他のモノ *einem andern* に属しており、彼自身の喪失なのである。」(MEGA I/2: 367) 引用文中の「ある他のモノに」の主格をただちに「ある他人 *ein anderer*」と理解してはならず「ある他のモノ *ein andres*」と理解すべきであることは、すでに述べた。

第1に注目すべきであることは、労働者において外化の、疎外の活動として現れるすべてのことが、非労働者〔資本家〕においては外化の、疎外の状態として現れる、ということである。第2に、生産における、また生産物に対する労働者の現実的な、実践的な関係行為は、労働者に対立している非労働者においては、(心情の状態として)、すなわち観想的な *theoretisch* 関係行為として現れる。(MEGA I/2: 375)¹⁵

『経済学・哲学草稿』において獲得された疎外論(疎外された労働の概念把握)は、『要綱』(1857年～58年)以降のマルクスによって、(1) 価値および資本の支配を物象の人格に対する支配として把握する物象化・物化論としてより精緻に展開される¹⁶とともに、(2)

¹⁵ ここは従来の翻訳が訳し損ねている箇所である。

Zunächst ist zu bemerken, daß alles, was bei dem Arbeiter als *Thätigkeit der Entäußerung, der Entfremdung*, bei dem Nichtarbeiter als *Zustand der Entäußerung, der Entfremdung* erscheint. Zweitens, daß das *wirkliche, praktische Verhalten* des Arbeiters in der Production und zum Product (als Gemüthszustand,) bei dem ihm gegenüberstehenden Nichtarbeiter als *theoretisches Verh[al]ten* erscheint. (MEGA I/2: 375)

岩波文庫版『経済学・哲学草稿』(城塚登・田中吉六訳)では次のように訳されている。

まず第一に注目すべきなのは、労働者の場合、外化の、疎外の活動として現われるすべてのことが、非労働者の場合、外化の、疎外の状態として現われるということである。第二に、生産におけるまた生産物にたいする労働者の現実的、実践的態度(心の状態として)が、彼に対立している非労働者の場合、理論的態度として現われるということである。(岩波書店 1964: 106)

翻訳の第1の(そして最大の)問題点は、「(心の状態として)」のかかる位置である。この直前の文章において「労働者の場合、外化の、疎外の活動として現われるすべてのことが、非労働者の場合、外化の、疎外の状態として現われる」というように「活動」と「状態」が対置されているのであるから、「第二に」以下の文章においてもこの対置が維持されなければならない。そうすると「(心の状態として)」は「現われる」にかかればならない、つまり「理論的態度として」と同格であると理解しなければならない、またドイツ語の構文上もそのように解釈することができる。岩波文庫版訳者は、「労働者の現実的、実践的態度＝「(心の状態)」と解釈しているが、このような誤解を避けるためには *Verhalten* を「態度」(「心の状態」と誤解されかねない)と訳したことも問題であった。翻訳の第2の問題点は、*theoretisch* を「理論的」と訳している点である。これは誤訳とはいえないが、明らかにギリシャ語のプラクシスとテオリアの区別を念頭に置いていると思われるので「観想的」と訳すべきであろう。

¹⁶ 「物象化」は『要綱』においてすでに重要な方法的概念として用いられており、「物象化」のもとに(1)物象化された社会関係、(2)モノの性質への凝集が議論されてはいたが、(2)のレベルをザッとと区別されたディングの問題として概念化するまでには至らなかった。『要綱』においても、事実上、2つの論理的レベルが設定されてはいた。(1)「資本とは明らかに……一つの生産関係でしかありえない」(MEGA II/1.2: 415)。にもかかわらず同時に(2)「資本はたんなる物象であるように見え、資本を構成する物質と完全に一体化しているように見える」(MEGA II/1.2: 415)。この2つのレベルの区別を方法的に自覚したところに、物象化と物化の区別が成立し、ザッととディングが区別されるようになる。『要綱』では方法的自覚がまだここまで進んでいないから、議論はザッと「物象化」をキー・ワードとして展開されることになった。ザッととディングの区別、それにもとづ

物象化論との関係において疎外論は、(1) 労働者が自らの生産条件および生産物に対して否定的実践的(反逆的)に関係せざるをえないこと、(2) 労働者から疎外された物象の支配が「社会的労働の生産力」の創造を情け容赦なく追求するシステムであること、以上の論点を解明することによって、(3) 資本主義的経済システムを歴史的に限定された経済システムとして、すなわち「自由な人間社会」¹⁷へと至る歴史的通過点として展望するという固有の方法的役割を与えられるに至った。

労働の客体的諸条件が、生きた労働に対立して受け取る自立性が、ますます巨大になってゆき、……社会的富が、疎遠で労働を支配する権力として労働に対立する部分がますます強力になってゆく。強調されることは、対象化されていることではなく、疎外されていること、外化され、譲渡されていることであり、社会的労働が自らの諸契機の一つとして自分に対立させた巨大な対象化された権力が、労働者にはなく、人格化された生産条件である資本に属することである。……この対象化の過程は、実際、労働の立場からは、外化の過程として現れ、資本の立場からは、他人の労働の領有の過程として現れる。こうした歪曲と転倒は、一つの現実的なものであって、労働者および資本家の観念の中にしか存在しない、ただ思い込みに過ぎないものではない。しかし明らかに、この転倒過程は、歴史的必然性にすぎない、つまりある特定の歴史的出発点ないし土台から出発して生産諸力を発展させるための必然性にすぎず、生産の絶対的必然性ではなく、むしろ一時的必然性である。そしてこの過程の結果および目的(内在的な)は、この土台そのものを、過程のこの形態もろとも止揚することなのである。……労働の社会的権力が対象化することの必然性は、ブルジョアの経済学者たちにとっては、労働の社会的権力が生きた労働に対して疎外されることの必然性と切り離すことができないものとして現れる。しかし……個人の活動を直接的に普遍的ないし社会的な活動として定立するならば、そのことによって生産の社会的諸契機から疎外というこの形態ははぎ取られるのである。(MEGA II/1.2: 698)

「資本の生産力」は、人間を生産手段から引きはがし自給自足生産様式を破壊し、貨幣経済によらなければ生きてゆけない大量の人びとを世界的規模で出現させた。「資本の生産力」によって引き起こされる人間の全般的貧困化を、労働主体の側から主体的に捉え返す概念が疎外である。疎外は、資本主義システムに抵抗する諸主体が、いわば徒手空拳で反抗するのではなく、「資本の生産力」に支配された生産・生活過程の中で、技術的、社会的、政治的に訓練され陶冶された主体として形成可能であることを確認するための方法的概念であった。ここに、疎外論が、物象化・物化論を前提しつつも、それを超越論的次元を切り開く可能性を内包しているとともに、狭義の経済学の枠内には収まらない理由がある。疎外論と物象化・物化論の媒介関係を解明するために、マルクスは経済学批判をさしあたりは、物象化・物化に軸足をおいて展開したのであった。

くディング固有の問題領域が明確に形成されるのは、1864-65年『資本論』の草稿の執筆時期であった。『資本主義的生産過程の諸結果』と『第3巻草稿』が主要テキストである。¹⁷ 「自由な人間社会」とは労働者のアソシエーションにもとづく社会のことである。

引用文献の表記

MEW: Karl Marx- Friedrich Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin.

MEGA: Marx/ Engels Gesamtausgabe, Dietz Verlag oder Akademie Verlag, Berlin.

MECW: Marx- Engels- Collected Works, International Publishers, New York